

慈覚大師の足跡と  
仙の峠地蔵菩薩像



目次

民話・仏の峠の地藏さん	1頁
仏の峠の地藏堂の由来と慈覚大師	3頁
月桂山清光寺の由緒と 伝・慈覚大師作・地藏菩薩像	9頁

# 仏峠の地藏さん

昔はのお、仏峠を「まもの峠」と言うもったんじや。

峠の道は、郷から畑倉や吉枝の方に行くのに通る道じゃったが、

山の中の細い道で、まわりにゃあ………大きな木がようけ生えとって昼間でも暗うていびしかった。

その上「まもの」が出てきて、よお、悪さをしよって通る人をたまげさしたり、

たまにゃあ、さろうて行きよった。

皆んながいびしがってのお、よお通らんようになって困ってしもうたんじや。

そこで、村のもんが寄って、どがんしたもんじゃろうかと話しとったが、ええ思案が浮ばんじやった。

そこへ、たまたま旅のお坊さんが通りかかって、その話を聞かれ

「それはお困りじゃろう。拙僧がそのまものを封じ込んで進ぜよう」

と、いんさってのお、

峠にこもって、御念仏を唱えながらお地藏さんを刻みんさったんじや。

それで、村のもん「峠にこの地藏さんをまつりお念仏を唱えて峠を通りんさい」と、

教えられてのお、どこかへ行きんさったんじや。

そこで、村のもんは峠にお堂を建てて地藏さ

(仏の峠)



んをまつり、毎年おまつりをしたもんじゃ。

そしたら、それからちゆうもんは、

「まもの」が出んようになって、

みんなが安心して峠を越えられるように

なったんじゃ。

それから、みんなが旅のお坊さんのお蔭じゃ、

あのお坊さんは、ただのお坊さんじゃあるまいのお、

仏様の化身じゃあなかつたんじやろうか。

仏様のお蔭じゃと言うて、いつとはなしに仏峠と言うようになったんじゃ。

方言

○のお……………(語尾につく方言)

○言うとった……………(言っていた)

○ようけ……………(多く・沢山)

○いびしかった……………(恐ろしかった)

○たまげさしたり……………(おどろかしたり)

○よお……………(よく)

○もん……………(者・人)

○どがん……………(どのように)

○いんさって……………(言われて)

○ちゆうもんは……………(と言うものは)

(仏ノ峠の木像地藏菩薩)



(慈覚大師作との言い伝えがある)



←(仏の峠の地藏堂)

## 仏の峠と地蔵堂の由来

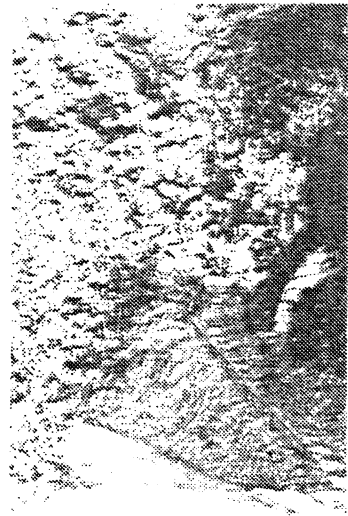
第一部の民話編の中に収録している「ほとけんとう仏の峠の地蔵さん」について、文政二年（一八一九）原田村から広島藩に差し出した古文書（国郡志御編集下志らべ書出帳）の中に仏の峠の地蔵堂について記載が見られる。

この史実から民話が生れ原田の地に永い間語り伝えられてきたものであろう。むかしは大崎島の海岸線が大串は恋路近く、原田は太田、中野は吉枝附近から本郷や丸山の鼻あたり、原下及び東原下まで海が入り込んでいたようです。

その頃、村々を結ぶ道路は山を越え野を渡り、里から里へとつながっており、人里離れた山深い峠を越えるところもあり淋しい場所が多くあったことでしょう。

往時の道筋は原田の郷から畑倉を経て吉枝を抜け、本郷、山尻へとつながる道路が大崎西ノ庄（旧西野村と旧大崎南村）〜中野庄（旧中野村）〜東野庄（旧東野村）を結ぶ主要道路であったものと思われれます。

（仏の峠）



（左―新道 右―旧道）

この旧道も、現在では大部分が改修され車が通れるようになり、昔日の面影はありませんが所々に旧道が残っていて有りし日の風情を留めています。

往時の原田の郷と畑倉の間の峠道には天を突くような老松や椎、楠の巨木が生い茂り、昼なお暗い淋しい山道であったと思われれます。

仏の峠の地蔵堂について清光寺二世溪山和尚が天文二十二年（一五五三）書き残した文書が文政二年（一八一九）原田村から広島藩に差し出した「国郡志御編集下志らべ書出帳」に記載されているのでこれを要約して紹介します。

★ 湊山和尚の遺徳

元亀年中（一五七〇～一五七三）の頃、仏ノ峠という在所に地藏堂が一字有ったが人里離れた辺鄙なところなのでお参りする人も堂守りの人としてなくお堂は荒れ果て、地藏菩薩像は雨ざらしになって痛ましいお姿になっていた。

時の清光寺住職湊山和尚はこの様子を見て、ひどく悲しみ寺内に小堂を建立し、地藏菩薩像を引きとり、おまつりなされた由、このとき、旧地の仏ノ峠には、なお一体の石地藏が残っていることが記載されている。

当時いかなる理由によるものか、この地藏菩薩像は慈覚大師の手による由緒のある作との言い伝えがあったのか。この木像の地藏菩薩は現在も清光寺の一隅の厨子の中に安置されており、参詣すればいつでも拜むことができる。

★ 慈覚大師が果して来島されたのか

民話の中に出てくる旅の僧とは慈覚大師であったのか？

（伝・慈覚大師作地藏菩薩像）



大師が諸国を行脚したおり、この大崎島にも錫を留められたのであろうか、疑問の残るところである。弘法大師の足跡は多いが慈覚大師については知られていない。

いつの頃か定かでないが惜しいことに誰かこの地藏菩薩像を泥絵の具で彩色し、元の御像の姿を著しく損なっている。しかし、泥絵の具が剝離している部分や台座に残る渋い金泥から元の御姿を想像すると並の作りではないことが伺える。光背つきの優しさと、慈悲のあふれるお姿を拜むと、慈覚大師作との言い伝えが本当のように思えてくるのである。

★ 仏の峠の地藏堂の石地藏

湊山和尚が天文二十二年（一五五三）に書き残された

ものを文政二年（一八一九）広島藩に提出した国郡志御編集下志らべ書出帳の中に旧地の仏の峠にはなお一体の石地藏があると記載が見られる。

この石地藏は今も仏の峠の地藏堂内に安置されている。いつ頃作られたものか、文政二年（一八一九）の書出帳には元亀年中の頃と記載されている、事実であれば大崎島最古の石造物である。

この石地藏の作りも秀逸でその姿は限りなく優しさがにじむお顔に慈悲を宿し、衆生の祈願をお聞きなされるお姿が伺えるもので、恐らく当地方においてかつては名のある石工の手によるものと思われる。

永い歲月の間には地藏菩薩には受難のときがあったものか、台座が失なわれていて見当らない。いかながなされたものか、今となってはこれを確かめる術がない。

元亀年間より今日まで地藏堂は荒廃、再建を繰り返すこと、いくたびか、地藏菩薩は、原田の歴史をみつめて今日に至っている。昭和の初期頃まではこの地藏堂の前で盆おどりが盛大に行なわれ「仏の峠の地藏さん」と、

原田の人々から厚い崇拜と親しみをもたれていたものである。

(地藏堂内の石地藏)

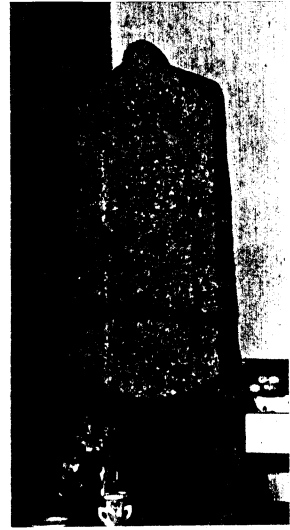


(仏の峠地藏堂)



お堂の周囲には樹齢二〜三百年を越す老松が生い茂り、地藏堂の歴史の古さを物語っていたが、昭和三十年〜四十年代にかけて松喰虫の被害を受け、一本、二本と枯死して、現在は一本も残っていない。由緒ある地藏堂も今

(庚申塔?)  
(地藏堂建立記念碑?)



★碑文の影りが浅く、且つ風化して判読がむづかしいが、所々拾い読みすると地藏堂建立の記念碑と思われる。全文解読出来れば「仏の峠」の歴史が判明するかも?

では人々から忘れ去られて訪れる人としてなく荒れ果て往年の姿はない。残された老松の古株に、ありし日の面影を忍ぶ外はない。戦後の世の風潮とは言え淋しいことである。

地藏堂の中に石の地藏菩薩と並んで、庚申之塔と思われる見るからに古びた石塔が一基ある。誰れが、いつ奉建したものか、年代や字句の刻みは風化のため判読することはできないが、庚申講が行なわれていた江戸期のものでそれもかなり時代を逆のぼるものであろう。

★ 湊山和尚 清光寺二世住職

元は伊予国(愛媛県)今治の大仙寺三世住職であった

が、閑居の身となったので大崎島原田の地に錫を進められ、当時住職も絶えたる、小茅舎の瑞鳳山徳隣寺に一夜の仮宿をとられたおり、徳隣寺がその昔、天台宗にて寂明上人の道場で由緒ある古跡であることを聞かれ、俗塵を避け、法灯の継承にふさわしき地なると思い、この里に留まることにして、しばらく托鉢の日々を過されたいたが、村人その徳を慕い帰依する者多く、かつ徳隣寺の住職に留まることを強く懇願されて安居されたという。

その後、朝に山谷の植花を、夕べには峯の月を愛でられ、いつしか山号を月桂山、寺号を清光寺と唱えるようになったという。のち伽藍建立の思いを起こし所方の檀那の助成を仰ぎ遂に一字の梵宮を建立した。

ときには、天文二十二年(一五五三)仲秋の吉日なる由。

★ 慈覚大師

天台宗比叡山延暦寺第三世座主

平安初期の僧、円仁と称し承和二年(八三五)遣唐船



で海を渡り、唐の都長安で修業、後五台山で天台教学や念仏行法を学び、更に長安におもむいて、密教の奥義をきわめて、承和十四年（八四七）に帰朝、後天台宗の開祖、最澄（伝教大師）が開山した比叡山、延暦寺の座主となり、日本天台教学を大成し、比叡山興隆の基礎を築いた。

貞観八年（八六六）清和天皇から慈覚大師の諡号を授かる。

### ★伝・慈覚大師作『地藏菩薩像』受難を越えて

一千百有余年、原田の地に根付き語り伝えられた伝説天台宗の高僧、慈覚大師作と伝わる仏の峠の地藏菩薩像が受難を越えて慈悲に満ちた耀くばかりの御姿を再び拝むことができたことを至上の喜びとするものです。

### 「受難と再生」

①元龜・天正年中（一五七〇）戦国の世に、村は疲弊し、慈覚大師作と伝わる地藏菩薩像を祀るお堂は朽ち果て、御尊像は雨露に晒されていた。時の清光寺住職 溷山和尚これを悲しみ寺内に地藏堂を建立し迎えられ

た。（以来今日に伝わる）

②平成三年（一九九一）未曾有の台風十九号により地藏菩薩像大破した。時の住職 仁哉和尚は止むなく自然に帰す（土に埋める）事を決断された。

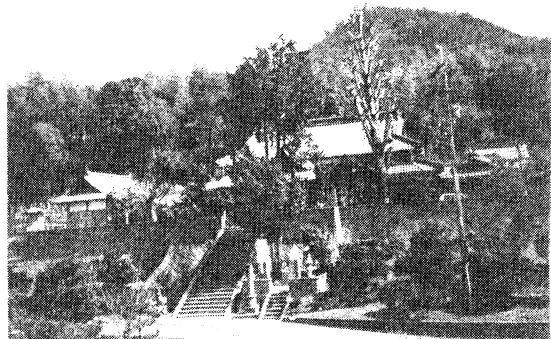
一千有余年の伝説がありときには村人を救ったいわれがある高僧「慈覚大師」の手による尊像を無にするには忍びず仁哉和尚に復元することを申し出たところ

（月桂山清光寺）

快くお許しがあり、創意工夫、出来るだけ原型に近いお姿に復元することができたので、仁哉和尚にお願いして郷土史研究会の有志により形ばかりの落慶法要をおこなった。

歳月は流  
れ第十八代  
清光寺の法  
灯を嗣いだ  
真英和尚に  
より地藏菩

（大破した地藏菩薩像）



(復元修理後の地蔵菩薩像)



像のように拝される。平成十七年七月二十三日恒例の地蔵盆に信徒多数参詣されて盛大に披露式が挙行された。

像は仏師による本格的な修理が行なわれ繚乱豪華の中に気品と慈悲が包含された地蔵菩薩

註・台風十九号で大破

した地蔵菩薩像を修理復元したのは、主担当・谷本巖、補助・金原兼雄兩人。

★地蔵盆当日の盆踊りには老若男女踊りに加わり家族で楽しい一夜を過ごし、境内に続く参道の暗闇のなかに浮かぶ万灯絵の灯りには幽玄の世界に身を置いた思い

(復元修理後の落慶法要)



をされたのではなからうか。  
☆(地蔵盆にお参りした筆者の感想)



(伝・慈覚大師作地蔵菩薩像)

→(仏師による修理後の地蔵菩薩像)  
『参考』

現心山 (青森県下北半島)

起源は定かでないが山岳修験信仰から始まって、口寄せ、死者を呼び戻す「恐山信仰」となったとされる。

十七世紀頃、禅宗・浄土宗・天台宗・真言宗の諸寺院が関係し、慈覚大師(円仁)が本尊「地蔵菩薩」を祀り堂宇を建立した。

なを、恐山信仰に見る死者の霊を呼び戻し、会話する「いたこ」は昭和になってから始まったとようである。

山寺・立石寺 (山形県山形市山寺)

天台宗・貞観二年(八六〇)慈覚大師(円仁)創建  
開山のとき、伝教大師(最澄)が創建した比叡山延暦寺根本中堂の法灯を分灯し今日まで燃え続けている。

# 月桂山清光寺由緒と伝慈覚大師作地藏菩薩像

(国郡志御編集下彈書出帖・原文)

(文政二年・一八一九)

一禅曹洞宗耆ケ寺

本尊聖觀世音菩薩

本堂 庫裏 山門

地藏堂一宇 鎮守荒神堂一宇 長屋一軒

山号月桂山 寺号清光寺

夫當寺者何曆乃時代星霜幾許経たるといふ事不詳といふと茂往古者天台宗にて瑞鳳山徳隣寺寂明上人乃道場たりしとかや云傳わ連里即往古能寺地者當時より里北に當里式丁程離里明地有つ羅く往年を察するに巍然たる精舎秀山根朝暮能梵唄怠慢なかりしとかや

然か有連と嗚呼惜へ具悲へし時移世變して一山不殘為兵乱に被焼失せしに誠に希異哉本尊聖觀世音者行基菩薩乃御作ニ而座せる故乎又靈感一方那羅ざる故乎歴々然として懸る當難を逃セ玉ふとかや故に万民住僧心を合せ又小

梵宮を宮薩埵を安置し奉る事亦年久し然賀してよ里日や月や幾若茂経津羅んや又零落に及婦傷哉茲ニ寂明上人能有功茂薄微に移里し時補任乃僧茂なかりし故乎終に破損を本として廢寺に及なんとす然有るに四隣乃蒼民敬仰之深餘里に世音菩薩乃雨風に指連玉わん事を憫得里て微々なる一宇を此地へ再建せん事に本付朽るを捨堅を取里なんなく小茅舎を宮彼能尊像移し奉里致拜する事又年久しとかや然して後豫洲今治大仙寺乃三代深山和尚訪道弘法の志深故乎終に彼の寺を閑居の身と那梨遠地此地に錫を飛放歴能砌此島の地を躑セ羅連しに一夜の眠を當寺に暖させ玉いし席當寺の旦那久保氏なる者と四方八方能物語乃折節當寺乃由緒前來乃趣を聞連誠に古跡成るをかんし又塵避乃地な里しを愛當地に甌鉢を留むやと思を起し依之郡民帰依乃心根茂深故乎大永年中能頃より里住職を務呉かしたのみし故錫を此山ニ懸農に谷之植花を愛夕に峯能皎月を祝して何とな具山号を月桂山寺号を清光寺と云做せ里故に往古の瑞鳳山徳隣寺を引かゝる左の山号寺号唱來里後優天文能頃伽藍建立能思を起し十方檀那能助情に

よ里終二一字の梵宮を営むる其棟牘の文ニ曰

異産不殊絶織毫(中略四字)凡迷雲持地関□□□□歎喜国 就中

厘断一如来茲惟山門越檀十方施主等放捨自己淨財而以  
建立一字 願依此功德帰依信男信女煩惱海中断業職淨

邪国裡圓種智伏祈一天恭平増 民運萬国安寧撫育群民

專□山門鎮靜 造無難火盜專消福寿延長者也 天文二

十二年仲秋吉旦

月桂山清光寺住持梁山叟謹誌

檀門長司 久保兵部

右棟牘能文言大概愚察して写といへと茂虫喰決字を如何  
せん豫而元龜年中能頃佛之峠と云在所に地藏堂一字有に  
餘里畝野乃邊故乎破損多起に移るを悲て當山の地内江引  
はやと思起故終に寺の右里に引取再建有里しとかや然る  
に此地藏尊者慈覺大師能御作にて座せると云傳里其旧地  
に茂今に石地藏有里起且梁山和尚者慶長七年入滅セ羅連  
此によ里て大仙寺末寺と定里怒且二代全宅首座三代惠寒  
和尚四代惠良藏主五代淳峯和尚六代淳豫和尚七代目得列  
長老任職之任たる時代諸堂大破に及し故元文元年に地藏

堂再建寛延元年二本堂痛し故取崩朽たるを去里庫裡に取  
直し同二年本堂再建いたすな里棟牘文茲畧ス寶曆五年ニ  
山門立替其頃迄平僧寺にて有しな里尤先住淳豫和尚茂當  
寺を法懂知識寺に致度志阿里といふと茂抱病起而事ふ能  
る故其弟子たるを以て得列長老老師之志を続何卒法懂知  
識寺に成はやと思を起發し 御公邊又ハ国縁関三ヶ寺江  
上聞之上宝曆乃頃蒙御免許即大仙寺二代和尚之牌名を請  
し法懂開山に敬仰セ羅連然るに故有里大仙寺二代周歎宕  
丘和尚者當時開基梁山能師道な里しを以周歎和尚を開基  
と永々仰ぐ開基能心に毛叶わんとぞ思な里同二代者即開  
基梁山和尚を立尽此茂廢寺を取立羅連し恩儀を思故乎同  
三代者淳豫和尚那梨是者得列和尚乃下師な里し故三代ニ  
立置な里同四代得列和尚也且又得列和尚寛保元年転衣乃  
望有故 御上江願面差上即兼年越洲大本山永平寺ニ登  
請疏文意ニ応し疏之文茲畧ス一夜任職を相務同曆同年三  
月廿八日京都於道昌庵応 御勅請於右大辨頭道之館ニ  
御倫旨頂戴文意茲押茲 御倫旨頂戴後朝夕無怠御宝祚長  
久之御祈禱致修行凌して安永二年能頃及老年法務成かた  
(以下省略……)